

第 1 回社会教育・スポーツ専門委員会 意見の概要

1 第 6 次山形県教育振興計画の骨格（素案）について

- 非常に精査された内容となっている。どこが目指すところなのか、絞り込んでやる部分もあっていいのではないかな。
- 骨格の部分については、イメージ図がわかりやすく、良いと思う。しかし、社会教育に関する部分について、「家庭と地域の教育力を高める」ということで、非常に抽象的であるため、今日の協議で出される課題や意見など言葉を盛り込み、より具体的に記載した方が良い。
- 第 1 回検討委員会の中で、「山形らしさ」ということで議論があったが、「自尊感情」を育む際に、山形県の「県尊感情」を育てていくということも盛り込んでみてはどうか。
地域の人や自然、歴史に直接触れ、関わることは、山形の良さを知り、「山形らしさ」に誇りを持つことにつながる。そのようにして醸成した地域を大切にする「県尊感情」というものを自尊感情と共に育てていければと思う。
- 検討委員会の中で出た意見等もよく反映された素晴らしい骨格案となっていると思う。そこで感じたことは、この素晴らしい山形県の計画をどのようにして市町村そして末端まで浸透させていくのかということ。各市町村でも色々考え、取組みを行っているが、目指すところは一緒であると思うので、そういった意味でも、考えをお聞かせ願いたい。
また、各青年会議所等でも、地域活性化のために様々な取組みをしているところがある。そのような活動をしている方々に対して、県として支援を行っていければ、よりスムーズに取組みが進むのではないかな。
- 今回の計画は学校現場だけでなく、広く県民に語りかけていく内容を含んだ計画である。そのためにも、まずはわかりやすい、心に訴える内容となるように配慮いただければと思う。

2 社会教育・スポーツ分野に係る検討課題について

(1) 総括的事項

- 山形県道徳読み物資料集「いのちを見つめる」に（後藤委員の活動を）掲載していただいているが、これを見て、助産師になろうと思っているという子ども達がいる。身の回りで輝いている人を取り上げていくことも大事な活動ではないかな。
- いのちの問題について話が出たが、原点に立ち戻って考え、便利さやコスト偏重といった安易な考え方に流される社会風潮の見直しを女性の視点から角度を変えてやり直す必要があるのではないかな。
また、今までなかったこのような視点をどのように一人一人に理解してもらえるか、そのための手段が大切になる。
- 「いのちは大切だ、大切にしよう。」とはよく言われるが、「あなたが大切だ。」と言われたことのない子どもが多いことに気付かされる。輝く大人がいないと子どもも輝かない。大人が優しくないと子どもも優しくなれない。極端な例では、面倒だから親になんかなりたくないという子どもがいるが、それは「面倒だ」と言う親を見てきたからではないかな。
山形でのびのび育ててほしいと思っても、認めてもらえない寂しさから背伸びをして都会に出て行く子どもがいる。

まずは、一人ひとりの子どもを大切にすることが大事。また、自分の生まれた意味をわからないまま大人になり、親になっている人も多く、祖父母になって自分の子育てを後悔する人もいる。それを思うと、一人ひとりが輝ける地域を大事にしていけないといけないと感じている。

(2) いのちを大切にし、生命を継承する

○ 「あなたが大切」という承認を得ることのできない、寂しさを抱えている子どもは、その心の穴を埋めるために異性へ向かってしまう傾向があると思う。未熟な上に、心の穴を埋めるために選択した相手とは幸せな人生を歩むことは難しい。穴を埋めるどころか、より傷つき穴が大きくなってしまうケースがほとんどのように思う。お互い（家族）を大切にし、幸福な人生を歩んでいく子どもたちを増やしていくにはどこからどのように教えていったらよいのか。

○ 先ほど、中学生からと申し上げたが、一番小さな団体である夫婦の単位から考えたい。最初の小さな団体である家族をつくる時に、しっかりと相手を見極める目を育てたい。寂しさを埋めてくれる相手を求めてしまうと、できちゃった婚となり、できちゃったと言われた子どもは、その後悔の念を受けたまま大人になる。その子どもが素敵な家庭を築けるかという点も難しい。

素敵な恋をし、傷ついてもそれを支えられる友達関係を作りたい、友達関係を築くには相手を思いやる子どもを育てていかなければならない。そのためには家庭内で家族がお互いに思いやる姿を見せることが大切。

生まれた時に悪い子はいない。少しずつ歯車が狂うののだが、例えばうそをつくようになったときに、うそをついたことを叱るのではなく、うそをつくようになった理由を気付いてあげられる大人が周りにいることが大切である。

家庭が居心地のいい場所となるように、一人一人を認め、孤独な父親、母親を作らないことが大切。自分が人から認められ、また、他人との出会いを大切にできる子を育てることが求められているのではないかな。

(3) 豊かな心と健やかな体を育てる

① 家庭教育の充実

○ 家庭内での言葉をまず大切につかっているかどうかを考えたい。しつけではなく、押し付けになっていないか。夫婦間で挨拶が言えないのに、子どもに挨拶を押し付ける。すると子どもは挨拶するようになるが、それは表面上いい子のふりをしているだけ。その結果、挨拶のできるいい子だと思っていた子が、ほかの子をいじめているということもある。

また、美しい姿や美しい立ち振る舞いは小さい頃から背筋を伸ばし、骨盤の中の筋肉を締めて立つことが大切だということを私たち大人が気付いていけば教えられる。筋肉を使い、しっかりまっすぐ静止して立つことができない人がいる。それは、楽な姿勢であることを許し、そのまま大人になっているから。今の親がそう育ててきているので今の親では気がつかない。それを直していくのは大変だが、今の中高生が親になったときに伝えられるようにしていけないといけない。

○ しつけという漢字は、身へんに美しいと書く。そういう言葉を持つ日本人であることを誇りに思いたい。そして、その言葉や文字は読書などで培われてきている。その必要性については、前回の会議でも議論されたところ。

言葉の暴力についても、言っていること、どこまでが許されるのかということがわからない。小さい時からしつけとして教えて行くことが大切だと思う。

- 先ほどしっかり立てないという話があったが、正しい立ち方、正しい歩き方を教えられてきていない。足のどの部分を使って、どう歩くのが正しい歩き方なのかということをお教えしないで、ちゃんと歩きなさいといっても正しくは歩けない。行動を変えるには正しい知識（正しい立ち方、歩き方、走り方）が必要。根底の部分をしっかり教えていただきたい。
- 礼儀やマナー、作法について、専門で教えている。幼稚園から中学校、高校、大学、企業にまで出向いて教えているが、基本的なしつけの大切さを感じる。しつけが最終的に社員のマナー教育に行き着く。くつを踏まない、ゴミ箱にごみが捨てる、あいさつをするなど、しつけをきっちりすることで山形県の子どもが輝いていける。
 美しさは、機能的でもある。どのように立ったら美しいかということは、どのように立つと機能的で正しいかということでもある。それは、体や精神の健康にもつながるものである。
- 各論でいろいろな議論がでたが、やはり家庭教育の充実が一番大切だと感じている。ママ・ナビのインタビューの中で聞いた「人は、承認の欲求というものが高い欲求としてある。それが得られないと死を選ぶ。」という言葉が印象に残っている。
- 家庭教育は大事であり、それがなっていないと勉強もスポーツも何をやらせても身にならない。調査票の中に、気軽に集まれる場、相談できる場が必要とあるが、そのとおりで思った。学習機会とすると本当に来て欲しい人は来ない。幼児期の母親が集まる場はあるが、小・中学校の子の親が集まれる場をつくることに力を入れていただきたい。
 県の事業で難しい場合は、市民団体に声をかけていただければ集まりやすい環境も一緒に考えて行くことができると思う。

② 健やかな体の育成

- 朝ごはんをぬいている子どもがいると資料にもあるが、強いアスリート、強い人間は食べる力が備わっている。体に必要な栄養素を伝えることも大事だが、食べるということは自分の体を育てているということをお子もたちに伝えて欲しい。
- また、自分の体がどう成長、変化するのかということをお成長段階毎に教える必要がある。指導者もそのことについて理解をし、助言、指導を行う必要がある。
 自ら学びたいという学習の意欲が大事だと思うが、人間の体の仕組み・機能について知る本が学校図書館には少ない。個別のスポーツの専門の本ではなく、どうやったらボールが遠く投げられるのかという疑問について、自ら調べられるような本の整備をもっと進めて欲しい。

(4) 確かな学力を身につけ、高い志をもつ

- 近頃、フェイスブックによる事件も起こっているが、子どもにただ禁止するだけでなく、しっかりと使い方を教えないといけな。そうしなければ、色々な事件に巻き込まれる危険性がある。ラインの使い方、フェイスブックの使い方を子どもたちに教えることができる専門家が必要ではないか。

(5) 学校を支える基盤を充実・強化する

- 体罰について、今のスポーツは励ますことで伸ばすとなっているが、かつては、信頼のうえに体罰が成り立つものと考えられていたこともあり、体罰がなくなるとスポーツで勝てなくなるのではないかと考えている人もいる。
- 体罰については、かつては問題が大きくなって初めて表面化するというところがあった。全

面的に体罰はいけないということで、山形県でも撲滅宣言を出されるようになった背景には、「やはり、体罰はダメだ。」と皆が思っていたことがあるからだと思う。もう体罰で教え込む時代ではないという区切りをきちんとつけるべきだということにきている。

手を出して教育をする行動を変えるのではなく、違った手段を使って、子どもたちの行動を変えていくことを考え、皆で取り組んでいこうという段階になってきている。

- 暴力、体罰のことについても触れられているが、これらのことと同時にあるのが、言葉の暴力である。言葉の暴力によりどれだけ子どもが傷ついているか。体罰だけにスポットが当たり、なぜ言葉の暴力にはスポットが当たらないのか。言葉の暴力により存在の否定をされた子どもたちは、もっともっと輝くはずであったのに、輝けなくなることもある。

ただ、言葉によって地域の大人に励まされ、子どもたちが真の人間として育つ糧となつていくところもある。そのようなつながりも大切である。

- 学校教育における言葉の暴力ということもあると思うが、家庭内での言葉の暴力についても含め考えていきたい。

(6) 地域の教育力向上を進める

- 公民館等を使って、子どもは子どもで遊ばせ、保護者がガス抜きをできるような場があるといい。

(7) 学校と地域が協働し、支え合う

- 地域を知り、知れば地域を好きになるということがたくさんある。ただ、学校教育だけでは難しいので、休日等を利用した、地域を知る仕組みを作らなければならない。小さなことでも、地域の方々と子どもたちが一緒になって、地域を知り、好きになるような体験ができる仕掛けが重要である。

- 地域を知るためには、時間と場所とそれに関わる人々のネットワークといったことが必要であり、そのための仕掛けを考えていかなければならない。

総合的な学習の時間が減り、運動力、学力の向上についても力を入れていかなければならない状況の中で、地域を知る時間をどのように確保していくかが重要ではないか。そのためには学校教育の中で主体的にやっていくだけでなく、地域の人々がイニシアティブをとってやっていく必要がある。

- 遊佐町の西遊佐小学校では、総合的な学習の時間の中で、既存のものを伝承していくということだけでなく、地域の課題を子ども自身が見つけ、そこから疑問がわいて、課題解決につなげていくという総合的な学習を1年かけて行っていた。

学力向上ということを考えても、地域を良くしていきたいというところから来る学習意欲と、単に自分の点数が上がれば良いというところから来る学習意欲とでは、大きな差がある。その意味で、自分たちが生まれ育った地域にどんな課題があり、それを解決することに資する人間になりたいという意欲を引き出すような仕組みも大切である。

(8) スポーツの推進

- 子どもたちが不登校になるなどの問題の多くの原因は、学校の授業だけではなく、体育系であるか文化系であるかに関わらず課外活動にあることが非常に多いのではないかと感じている。

興味が中心としてではなく、勝ち負けが中心となってくると、選ばれた子どもたちだけが認められるようになる。選ばれなかった子どもたちも勝ち負け関係なく興味を持って楽しんで活動し、存在意義を認めてもらえるような仕組みづくりが必要となる。

課外活動になると、定まった方針がなく、各指導者に委ねられているような状態であると思う。このあたりについても考えていかなければならないと思う。

- スポーツにおいては、子どもは間違えても負けてもくじけてもよい。そこで味わう悔しさを糧にして、どう次に進むのかということを知るいい機会がスポーツである。

言葉や力で押さえつけて成長させるのではなく、どうやったら自分が修正、変化できるのか、その変わり方を教えることができる指導者を育成して欲しい。

(9) 「山形の宝」の保全活用・継承

- 地域を知ってもらうための社会教育施設に関して、指定管理者制度を導入している施設についてはどうしても二極化が進んでいる。体制が整っているところは良いが、基盤がないと、施設があるというだけで、中身は何もないところや閉館してしまっているところが多い。

コミュニティセンターについても、活動の顕著なところがある一方で、建物が存在しているだけというようなところもある。かつては、高齢者とともにイベントをやり、子どもたちとつながりがあったところも閉館したりして、かなりの施設がなくなっている。

指定管理者制度自体がうまくいっていない状況の中であるが、施設も利用してもらわなければ社会貢献ができない。施設活用の重要性、必要性を感じることができれば、施設自体も頑張ることができる。

施設も人があってこそよりよい活動ができるので、施設の活用ということについても、考えていかなければならない。

- 伝統芸能や地域の文化というものを考えたとき、人に話す機会というものがあまりないと感じる。もっと地域を知る機会があればいいということだけでなく、人に話す機会ということも必要である。

スポーツは、様々な文化を持った人が集まる場なので、スポーツの機会を通じた伝統文化等の発信という仕掛けもできるのではないかな。

山形を出て、日本を出たときに、日本人として自慢して話すことは、やはり自分が育った地域のことであり、食べ物であり、環境の素晴らしさである。そのようなことを話すことで人としての自信にもつながるので、そういった視点も大切ではないかな。

- 山形、地域のことを誰かに表現し、伝えることは非常に大切。山形の自慢をして、素晴らしいと言われるとまた勇気づけられて、さらに山形を知っていくことにつながる。そういった仕組みができればと思う。